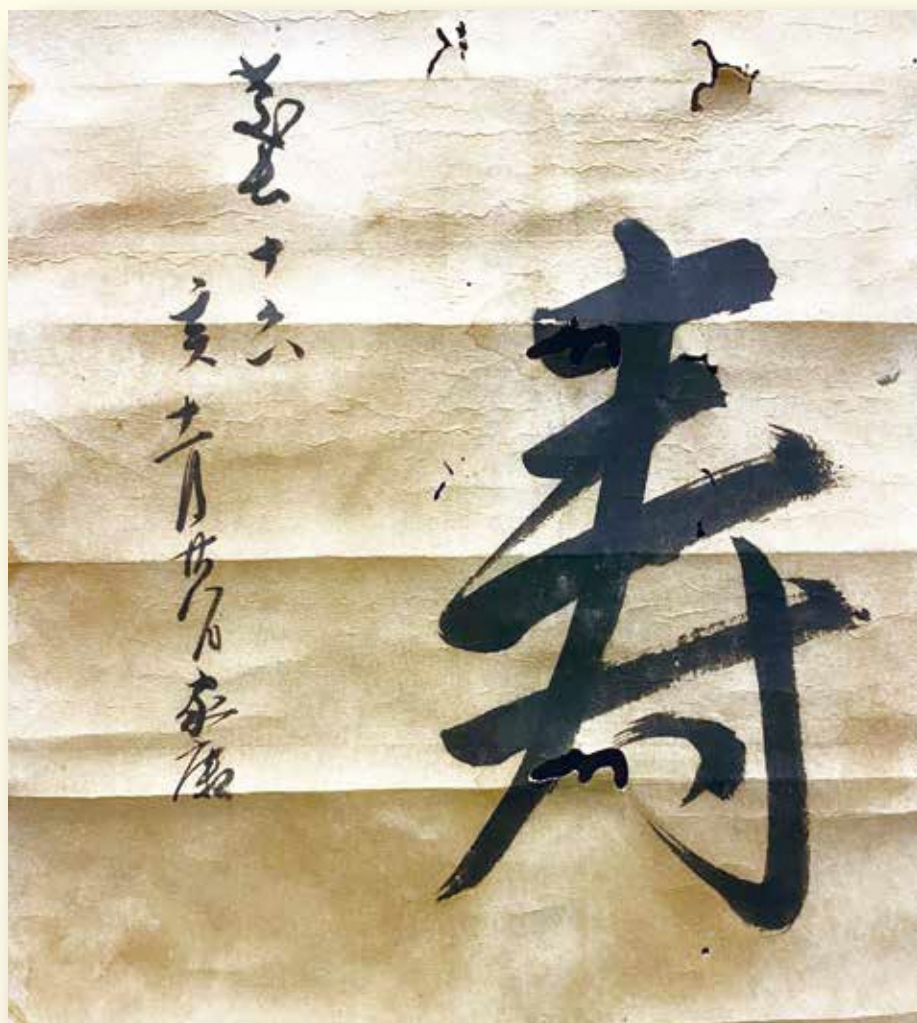


- シリーズ 沼津兵学校とその人材 107
林洞海が遺した徳川家康の偽筆
- 江原素六とその周辺 66
陸軍少将加藤泰久と江原素六
- 明治史料館の教育普及活動

二〇二三年一月	史	沼
	料	津
	館	市
	通	明
通巻152号	信	治



徳川家康筆「寿」(偽筆)
慶長16年(1611)11月28日
(当館蔵)

林洞海が遺した徳川家康の偽筆

幕府に仕えた蘭方医で維新後は静岡藩の沼津病院重立取扱をつとめた林洞海が遺した資料に、徳川家康直筆の「寿」という書がある。掛軸に表装されたそれには、明治二三年（一八九〇）に洞海が記した「東照公親筆寿字紙考」と題する解説が付されている。その解説によれば、駿府にいた家康が、七〇歳の記念として七〇枚を揮毫したものの一枚とされる。洞海の息子紀（研海、幕府オランダ留学生で静岡藩では静岡病院の頭をつとめた医師）が箱根芦之湯に滞在した際、たまたま湯治客としていっしょになった旧幕臣池田某の病気を診察してやったことから、その礼として池田から贈られたという。林紀は明治一五年（一八八二）に没しているので、この書をもらったのがそれ以前であることは明らかである。

紀に先立たれた洞海はそれ以上の詳しい由来を知るすがなかつたが、医者仲間であり親戚でもある松本順（蘭疇・良順）が池田某と知り合いである旨を紀から聞いていたので、この件に関して松本と直接話をすることができた。松本が言うには、池田某の先祖は徳川家康に近侍した旗本であり、老後は領地がある美濃国の某村に寺を建て、自ら僧侶になった。その後、その寺は無住となったので、池田の先祖が残した什器類は村の庄屋が自宅で保管することになった。明治維新の後、没落した池田某は美濃国のその村を頼り、庄屋らも池田家の存続に力を尽くしてくれた。庄屋が先祖代々預かってきた寺の什器類が入った櫃を開けると、徳川家康の書などが入っていたので、池田某はその数枚を携えて上京した。酒好きだった池

田某は、酔った勢いで他人に気前よくそれらを与えてしまった上、売却して酒代にしようとした。持参した書はすぐに尽きてしまった。そこで再度村を訪問し、残りの分を持ち去ろうとしたが、庄屋らはそれを拒否し、上京して松本順に事情を相談した。松本は仲介の労をとり、池田家の遺物の中から「寿」の字を上野東照宮に、親鸞の讃がある法然上人肖像を東本願寺に納めさせるなどして、寺社からの謝金を庄屋に渡した。庄屋たちも池田家維持のための資金ができたことを喜んだという。

以上が、林洞海が記した「東照公親筆寿字紙考」から読み取れたことである。では、旧幕臣池田某とは誰なのか？ そして家康の墨跡であると思われるものの真偽は？

実は、池田某とは池田松男（その前は松之助・吉左衛門と名乗る、諱は長世、維新後は大塚姓も使用）といい、池田図書政長を祖とする旗本の三代目当主であり、美濃国・上総国で五〇〇石を領した。幕末には講武所剣術世話心得、小姓組、奥詰遊撃隊取締などを歴任、亡くなったのは明治二一年（一八八八）だった。そして、この池田松男こそは、明治十年代に徳川家康の偽筆を多数作製し、各地の東照宮などに奉納したことで知られる男だった。有名な「人の一生は重荷を負て」云々から始まる「東照宮御遺訓」も、彼によって作られたニセモノがきっかけとなり、広く世に流布することになったのである。

池田によって作成された家康の偽筆には、「寿」の字や「東照宮御遺訓」以外にも、「虎」「武運長久」といった書や和歌、日課念仏、信長・秀吉・家康の

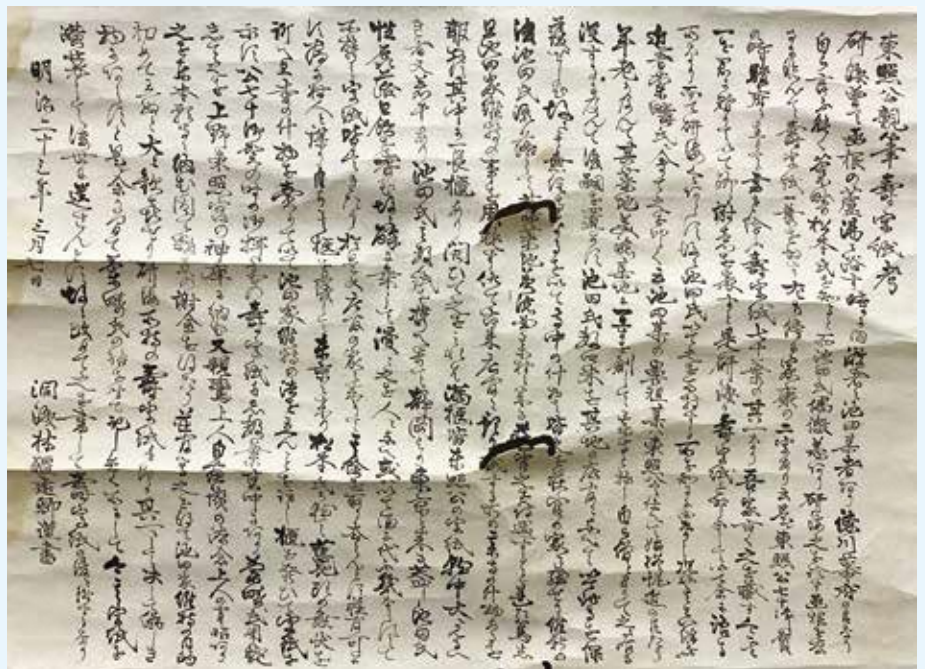
手形、徳川十六神将の手形、秀忠夫人に与えた訓戒など、実に多くの種類や数が存在した。洞海が記した中にもあった通り、東京の上野東照宮にも明治一一年（一八七八）から一三年頃に池田によって奉納された「寿」の字の掛軸が現存しているとのこと（ただし花押の有無に違いがあり）。これら偽物の数々について詳細に分析した先学の研究によれば、池田がニセモノ作りに手を染めたのは、幕末、先祖伝来の陣太鼓に家康が関ヶ原の合戦で使用したものであるとの墨書を入れ、他人に譲渡したのが最初で、その後は明治一一年から一三年にかけて家康の偽筆を盛んに世に送り出したとする。その一連の捏造には協力者がおり、旧幕臣の名士である松本順・石川桜所・岩田通徳・勝海舟・山岡鉄舟・高橋泥舟らが、偽物と知っていたながらホンモノであると鑑定したほか、奉納の仲介役になるなど、池田の行為の補助者になっていたとする。そして、彼らの動機としては、単なる無知や悪意ではなく、明治の新時代になじめず、江戸の栄光にすがり付こうとする池田の心性が家康の虚像づくりへと収斂していった可能性、そしてそのような池田に同情し、愛惜したのが松本や三舟らだったのではないかと推測する（徳川義宣「二連の徳川家康の偽筆と日課念仏」「金鯢叢書」第八輯、一九八一年、徳川黎明会）。

しかし、林洞海が記した「東照公親筆寿字紙考」からは、池田の行為の背景には、酒に溺れがちだった性格と生活の困窮、それを経済的に支援しようとした松本順と旧知行所の村人たちという存在が新たに浮上した。江戸時代の領民が領主による強制的な借金に苦しめられたことはよく知られる。ひよっとすると、美濃の村人たちは、純粹に元の殿様に同情したわけではなく、残された債務を返済させるべく、家康の偽筆を大量生産させたのではないかと疑いたくなるが、考えすぎだろうか。

そして新たに追加できる事実としては以下の点もある。洞海が記した中には、池田が静岡から東京に来たとの一節があるが、池田は静岡移住の旧幕臣つまり静岡藩士ではなく、朝臣、すなわち維新の際に徳川の臣列から離れ新政府に所属替えした旧幕臣だった。慶応四年三月に采地への土着願を提出、四月には尾張藩からの勧誘を受け勤王証書を提出、七月には上京願を提出し、一月には朝臣に差し加えられることを許されている(国立公文書館所蔵文書)。実際に美濃へ向け江戸を出立したのは四月三日のことだった(『旗本三嶋政養日記』)。父新之助は上総国の所領瀬又村(現市原市)に土着し、あえて父子で別々の居住地を選んだらしい。明治三年(一八七〇)一二月に松之助が瀬又村の名主に送った金銭無心の手紙には、「濃州ニは多分之借用金も有之」などと記しており、すでに領主・領民の關係が切れていたにもかかわらず(瀬又村は菊間藩領になっていた)、図々しくもさらなる借金を重ねようとしていたことがわかる(『市原市史 資料集(近世編4)』)。

新政府で松之助は一時海軍に入ったようで、明治三年から軍艦附使役試補をつとめたほか、四年や六年には撃剣場設置を東京府に願い出たことなどがわかつている。なぜか、明治二年七月には吉左衛門と改名、さらに翌年には松男と改名した(東京都公文書館所蔵文書)。いち早く朝臣となつて徳川の臣列から離脱した池田であつたが、あまり上手に明治の世を渡ることができず零落していった。そして、皮肉にも徳川家康の虚像づくりに邁進したといえる。

(樋口雄彦)



東照公親筆寿字紙考
当館蔵

東照公親筆寿字紙考
研海曾て函根の蘆湯ニ浴す時に同游者ニ池田某者あり徳川幕府の臣なり自ら言ふ能く蘭疇松本氏を知ると而池田氏偶微恙あり研海之を診す函根を去るに臨んで寿字紙一葉を出す左下傍に家康の二字あり云是レ東照公七十御賀の時駿府ニ在りて書き給ふ寿字紙七十葉の其一なり吾家古く之を蔵す今其一を君に贈りて以て聊謝意を表す是研海か寿字紙を出し示して以て余に語る所なり而て研海今あらず故ニ池田氏以て之を所

持する所を知るに由なく況や其真偽をや近者蘭疇氏ニ会て之を叩く云池田某の鼻祖某ハ東照公ニ仕へて始終昵近の臣たり年老に及んで其菜地美濃某地に一寺を創して某寺と称し自ら僧となりて之ニ居る没するに及んで後嗣を置かず池田氏数口米を其地の庄官ニ与へて以て此寺を保護せしむ故ニ其無住寺なるを以て寺中の什物者皆之を莊官の家ニ蔵せり維新の後池田氏流落して旧菜地美濃国某村ニ來る莊官之を待遇すること甚た篤志且池田家維持の事を周旋す依て古來庄官ニ預り蔵する所の某寺の什物あるを報知す其中に一長櫃あり開ひて之をミレ者滿櫃皆東照公の字紙就中大ニ見るへき者又若干あり池田氏其數紙を携へ去て静岡より東京ニ來る蓋し池田氏性磊落且飲を嗜む故ニ醉ニ乘して漫ニ之を人ニ与へ或ハ以て酒ニ是又庄官の家ニ來りて其余を取り去らんとす莊官可かず為に村人と謀り時ら其櫃を護して東京ニ來り松本氏に就て旧地頭の無狀を訴へ且寺の什物を売りて以て池田家維持の法を立んことを話し櫃を発ひて字紙を示す公七十御賀の時の御揮毫の寿字紙をは數葉其中にあり蘭疇氏周旋して之を上野東照宮の神庫に納む又親鸞上人自画讚の法念上人の肖眼あり之を東本願寺ニ納む因て夥多の謝金を得たり莊官等之を得て池田氏維持の目的初めて立ぬと大ニ歡喜せり研海所持の寿字紙も即ち其一ニして決して偽しき物にあらず是レ余か曾て蘭疇氏の話を聞て記し置く所にして今其字紙を潢装して後世に遺せんとす故ニ改めて之を書して寿字紙の後と附するなり

明治二十三年三月七日

洞海林疆建卿謹書

江原素六とその周辺66 陸軍少将加藤泰久と江原素六

明治後期から大正期、江原素六は人々の前で講演をする機会が少なくなかった。政治家ではなく教育者として演壇に立った時の演目には、一般人々に対し修養を説く内容が多かった。古今東西のさまざまな逸話を例に引きつつ、わかりやすさを心掛けた講話である。話の中には自らの体験を織り交ぜることが頻繁にあり、彼の履歴や交友関係などについて、思わぬ発見をすることがある。ここで紹介する「江原翁の給仕立志談(下)」(『東京朝日新聞』明治四〇年一月五日)という講演録もその一例である。アルバイトをしながら苦学して立身への道をつかんだという、幕末における自身の体験を述べた後(「上」『東京朝日新聞』明治三九年一月三十一日)、知り合いである肥田浜五郎の同様の逸話を出しながら、さらに他の例についても紹介する。

私が二十七の時陸軍に少佐をして居ました、其時の給仕をして居た人が如何にも熱心で伶俐に立ち働く上に暇があれば読書をして居る、私は之を給仕とは思はず実に尊敬すべき人だと思つて居ました、すると大阪に幼年学校が出来ましたから、私は第一番に選抜して幼年学校へ入れましたら、其程の熱心家だから無論成績も良い、後には仏国へ留学を命ぜらるゝなどで、今では少将に成つて居ます、其れは御存知の人もありませうが彼の旅順の戦で間接射撃をして敵艦の二三隻も撃沈めたと云ふ加藤君であります

というのが注目したい一節である。「加藤君」とは、この内容から陸軍少将加藤泰久(一八五四〜一九一七)であることがわかる。加藤は徒歩砲兵第三連隊長として日露戦争に出征、乃



加藤泰久
明治29年(1896)
山本龍太氏寄贈

木希典率いる第三軍に属し旅順要塞攻略に戦功をあげたのである。江原が二七歳の時に陸軍少佐だったというのは、あくまで幕府陸軍、あるいは静岡藩時代のことであり、その下で加藤少年が給仕をしていたというのも沼津兵学校でのことであろう。泰久の父加藤泰吉(庄之助)は、清水附や勘定、書院番格などの経歴を持ち、高二〇石四人扶持の幕臣だったが(『江戸幕臣人名事典』第二巻)、移住先の沼津では窮乏していたのであろうか、息子を働かせたのである。頭がよく勉強熱心だった泰久は、江原の目に留まり、明治三年(一八七〇)二月、明治政府の命により静岡藩が大阪兵学寮(幼年学舎)へ貢進生を送り出す際、六名の一人に選抜された。その年九月、加藤は沼津兵学校第六期資業生に及第していた。明治陸軍では陸軍士官学校に進学し、フランスへの留学(明治二〇〜二三年)もはたした。

江原と加藤について、このような関係性を記した文献は他には見当たらず、興味深い記事である。加藤が、明治四五年(一九一二)に開催された江原の古稀祝賀会の発起人に名を連ねているのも、このような関係が前提にあったからなのであろう。

(樋口雄彦)

明治史料館の教育普及活動

博物館の仕事の一つに教育普及活動があります。その内容は講座やイベントの開催、刊行物の発行など様々です。その中で、当館では近隣の小中学校と連携しての郷土学習や博物館の仕事についての学習を支援しています。今回は、今年度(12月まで)史料館を訪れた小中学校を紹介します。

郷土の偉人について
江原素六学習

- 6月28日(火) 沢田小学校4年生
- 9月14日(水) 金岡小学校4年生
- 10月4日(火) 開北小学校4年生
- 門池小学校4年生
- 10月7日(金) 門池小学校4年生

中学生の職業体験

- 10月20日(木)・21日(金)
今沢中学校2年生

昔のくらし(道具)や
街並みの移り変わり

- 11月17日(木) 原小学校3年生

史料館を
使ってね!

沼津市明治史料館通信 第152号

令和5年1月25日

編集・発行 沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂372-1

TEL 055-923-3335

FAX 055-925-3018

印刷 株式会社 耕文社

